



撮影 藤井宏昭

# 中 原 中 也 記 念 館

館

報

2000  
第5号

## 廳舎の屋根

館長 福田百合子

先頃、中也の最晩年に書かれた療養日誌が新しく発見されました。既に活字化されている「千葉寺雑記」と表裏を為す、大事な記録です。その中に、千葉の方言を挿入した俚謡を作つて書き留めていることに注目されます。

千葉の街サ見たば、千葉の街サ見たばヨ、  
県廳の屋根の上に、県廳の屋根の上にヨ、  
緑のお椀が一つ、ふせてあつた。(二部抜粹)

繰り返しの手法も中也の特色を示していますが、私は「県庁」の文字がとりわけ印象的でした。昭和8年、雑誌『四季』に発表された作品「帰郷」の最終節。

廳舎がなんだか素々として見える、

それから何もかもがゆつくり私に見入る。

あ、何をして来たのだと

吹き来る風が私に言ふ……

ふるさと山口の風の中に、厅舎を見ている中也ですが、この部分の頭二行は、作曲の段階で、友人内海誓一郎によつて削除されました。第一詩集『山羊の歌』に収録される時には「おまへ」という語を挿入し、私たちにも親しい次の一型で登場します。

これが私の故里だ

さやかに風も吹いてゐる

心置きなく泣かれよと  
年増婦の低い声もする

あ、おまへはなにして來たのだと……

吹き来る風が私に云ふ

初出原稿の序舎が、晩年の中也、千葉の県庁の屋根に重なるのです。中也の胸の中には、山口の風が吹き抜けていたのではないでしようか。

# 中原ならどう読む？



## 秋山駿

あきやましゅん  
文芸評論家。1930年生まれ。早稲田大学仏文科卒。60年『小林秀雄』で群像新人賞受賞。『知れざる炎—評伝中原中也』(77年)、『内部の人間』(67年)、『人生の検証』(平成2年 第1回伊藤整文学賞)など著作多数。

1年半ほど前に、中原中也詩集の朗読のCD作り(新潮社メディア室)に参加した。詩編の採録にも頭を悩ましたが、それより、詩のひとつの言葉、たとえば

「冬の夜」(在りし日の歌)なら、その「夜」を、よ、と読むのか、よる、と読むのか、と訊かれて、私は大いに閉口し出でてくる。

途中で、「冬の長門峡」(在りし日の歌)を指して、これは、ちようもん峡だぜ、というと、担当の岡田雅之さんが、あれ、ながと峠じゃないんですか?と聞き返したので、私は思わずんまりした。

実は私も長いあいだ、ながと峠、と読んでいたのである。  
どだい17歳で中原中也詩集を読んだ頃は、私のみなならず多くの人が、なかはら・なかや、と呼んでいた。韻を踏んでいる(?)、さすが詩人は、名前まで洒落ているねえ、と感心し合つたものだ。いくら大岡昇平さんに後になつてから、中原ちゅうや、と呼ぶのだと教えられても、なかなかピンとこない。

大岡さんがあるとき、中原がちゃんと振り仮名を振つとけばいいのに、「魚」だつて、お前、ウオと読むのか、サカナと読むのか、分かりやしねえ、とぶつぶつ文句を言つていられたことが、痛く思は出された。

「朝の歌」(山羊の歌)に、  
天井に 朱きいろいで  
戸の隙を 涌れる光

とあるが、その「戸の隙」を、私はずっと、戸のひま、と読んでいた。朗読CDのとき、待てよと思つて、佐々木幹郎編『山羊の歌』(角川文庫クラシックス)に収められている、諸井三郎作曲の楽譜を見ると、そこは、トノスキ(戸)の

すき)になつていた。ああそだつたのも、と思わず赤面したが、私の内部ではもう改変はきかない。

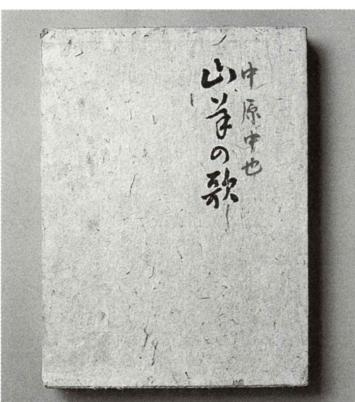
私の中原中也評伝の本のタイトルは、「知れざる炎」(評伝中原中也)である。よく見ていただきたい。知れざる、と、知られざる、とでは、言葉の背後に精神のベクトル、力のベクトルが、ぜんぜん違う。知られざる、では、炎は胸の裡にあるが、知れざる、は、炎を一剣にして空へと抛つたのである。それが中原の語感・語法の鋭さであった。この場合は、日本の語法の方がくだらないのである。

もつとも、この詩の末尾は、われかにかくに手を拍く……となつていて、その「拍く」は、どこの何を見ても、たたく、と読まれているが、私はそれが気に入らない。どこをどう読んでも、この詩の最後で、手をたたく中原のイメージなど、私には浮かない。では、拍くをどう読んだらよいのか、私は長いあいだ読み方を探している。

中原中也の詩は、人がそれぞれ、自分勝手に読めばいいのかもしれない。小林秀雄の「中原中也の思ひ出」(たつて、「汚れつしまつた悲しみに」を、汚れちまつた、と記している。



詩集『在りし日の歌』



詩集『山羊の歌』

初めて手にした創元選書の詩集の

「秋の一日」(『山羊の歌』)には、

(水色のプラットホームと

躁ぐ少女と嘲笑ふモンキイは

いやだいやだ！)

というのがあつた。あるとき、新版の中原中也全集でそこを見ると、「モン

キイ」が、「ヤンキイ」になっていた。

私は違和感を発した。誤植だったのかも

しぬが、前の、モンキイの方がよい

と感じた。もっとも、これは私の心理の

方に問題がある。私は敗戦時の少年だつ

た。やがて出現した、「躁ぐ少女と嘲笑

ふヤンキイ」の光景が、鋭く胸に刺さつ

た。不愉快であった。だから、中原に、

ヤンキイなどと言つて欲しくなかつた。

ヤンキイなど登場させてもらいたくなかった。それに、ヤンキイというような言葉とか言い方、中原には似合わぬと思う

が、どうであろうか。

そんなことをいえば、『山羊の歌』には、「羊の歌」という詩篇があるが、そ

の山羊と、羊との関係は、どうなつてい

るのだろう。何かの本の解説に、古代ギ

リシアでは、山羊の歌とは、悲劇の意味

であるとあつたが、中原の「山羊の歌」

は、そんな意味のものではあるまい？

中原中也訳『ランボオ詩集』の「幸福」は、季節が流れる、城塞が見える。

「いやだいやだ！」

で始まる。「あ、季節よ、城よ。」

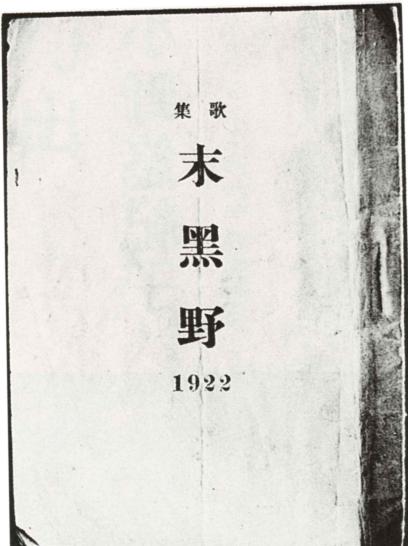
(小林秀雄訳)の詩のどこをどうしたら、

こんな翻訳になるのか。不思議である。

しかし、この2行は素晴らしい。ことに、「魂」が非凡である。

# 『小さき芽』と吉田緒佐夢

和田 健



歌集『末黒野』

吉田緒佐夢については前回も書いたが、奔放でなかなかの才子であつたらしい。『小さき芽』には、短歌のほか詩も

次のように書いている。今日から見えては取りあげるほどのものではないと考えていたが、

当時でも若山草之助という匿名の評者は

次のように書いている。

「偶作」吉田緒佐夢氏のは私は詩と

しては見ない。ただ吉田氏の気分を

のつぱらぼうに表白したに過ぎない。

だから何の暗示もなく……

と、酷評だが、ヤリ玉に挙がつた「偶作」

の初めの部分を抜くと——「裁判所の敷石

の道を／涙で頬をはらした／若い田舎娘

が／うつむいて帰つて行く……私通し

て子が出来た上に／家計困難のため／そ

の子をころしたのだ／お、哀れむべき娘

よ！」

その吉田が吉田翠泡のベンヌームで、

『小さき芽』10号に、彼らしい氣焰をあ

げている。題して「文学青年の群に与う」。

「文学青年」といえば郷党から唾棄せ

られ指弾される傾向が往々にして見え

る。それは俗人共が文学を解せぬ為でも

あるが、又其の責の一半は青年自身が

負うべきものである。事実県下の有象無

象の文学青年を見よ、ろくな奴は一匹も

居ないではないか。我輩はほとほと文学

青年の輩に嫌いでしまつた。つまり詩

や歌を少し嘲つて詩人気取りをするとは

何たる不心得だ、不心得も甚だしい」

毒舌はこの後も続くが、防長新聞社

というバツクがあつたにしろ、勇気があ

# 父 阿部六郎の思い出 小野悠紀子



阿部六郎（1904～57）

1927～28頃、成城高校の応接室にて。成城高校着任当時。この後中也と知り合う。

家族と一緒に外出することはまれな父でした。ある時、及第すればそれの学生の母上が“お願い”に見えて、玄関先に菓子箱を置いて帰ろうとしました。父は裸足のまま門まで追いかけて返してきました。甘いものがない時代です。子供たちは「あーあ」とため息をつきました。そのような日常のあれこれの中から、いつのまにか私は、大切なのは心と魂に計算することを厭うといふことで、影響を受けてしまったようです。そのせいか、未だに足し算引き算もまともにできず、現実感覚に欠けていて、家族や周囲の人々に迷惑をかけています。

2回目は、亡くなる少し前、私が高校に入った春でした。ハイネの生誕百年の記念講演会に連れてついてくれました。演者は佐藤春夫と中野重治でした。父と共有した、遠い日のあの時間と空間は今でも私の中で輝いています。

あの「謹厳実直」な父が私の知らない若い日に、中原中也や文学仲間たちと、甘い酒、苦い酒に酌酌して街を往つたことを想像すると、何かあたたかいう嬉しいものがこみ上げてきます。

（おゆき）故阿部六郎氏令嬢

父と詠別してから40余年が過ぎ、16歳の少女だった私も、今は父の没年齢をとうに越してしまいました。

生前の父を知る方たちは、その人となりを「清貧の人」「寡黙で静かな人」「謹厳実直」等の言葉で伝えてくださいます。

家族の中にあつた父の姿を思い出すとき、確かにそのひとつ一つが当てはまっていたように思われます。

成城学園で、後年は東京芸術大学でドイツ語の教師をしていましたが、その往き帰りに道である父は、いつも古びて傷んだソフト帽を被っていました。雪村

いづみの「オー・マイ・パパ」の歌詞さながらに……。

2階に書斎があり、父はそこで書き物をしたり、勉強や読書をするのが常でしたが、疲れると下の居間に降りてきて、ラジオの音楽に耳を傾けたり（テレビのない時代でした）、子供たちの遊ぶ様子を眺めたりしていました。

冬、火鉢に細長い指をかざして、静かに微笑んでいる父の表情が私は好きでした。子煩惱で、5人の子供を分け隔てなく愛してくれました。

けれども、時折、突然に雷を落とすことがありました。外の人には想像しに

くい一面だったかもしれません。被害者は、少しやんちゃなすぐ上の姉が多く、時には兄でした。当時はなぜ父が突然怒りだすのか分かりませんでしたが、後で考えてみると、それなりの理由はあったようです。

ある時、及第すればそれの学生の母上が“お願い”に見えて、玄関先に菓子箱を置いて帰ろうとしました。父は裸足のまま門まで追いかけて返してきました。甘いものがない時代です。子供たちは「あーあ」とため息をつきました。そのような日常のあれこれの中から、いつのまにか私は、大切なのは心と魂に計算することを厭うといふことで、影響を受けてしまったようです。そのせいか、未だに足し算引き算もまともにできず、現実感覚に欠けていて、家族や周囲の人々に迷惑をかけています。

2回目は、亡くなる少し前、私が高校に入った春でした。ハイネの生誕百年の記念講演会に連れてついてくれました。演者は佐藤春夫と中野重治でした。父と共有した、遠い日のあの時間と空間は今でも私の中で輝いています。



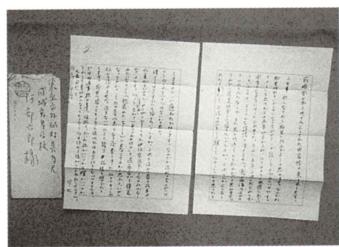
1955年頃東京渋谷区代々木上原の家の横で。右より六郎、筆者、筆者の妹・秋子、母・タカ。



1939年、成城高校のハイキング（小仏峠）にて。同僚の先生と。左奥に愛用のソフト帽が見える。

## 阿部六郎と中原中也

寄贈書簡解説



平成11年度企画展「在りし日の歌」のなかの子供。その展示のためにと阿部六郎のご息女小野悠紀子氏より、愛児を亡くした中也の阿部六郎宛書簡2通が寄贈されました。

阿部は、明治37（1904）年山形市に生まれます。昭和2年より成城高校のドイツ語教授となり、同時期に富永太郎の友人村井康男も赴任。この頃成城高校には、大岡昇平、古賀綱武、富永次郎、安原喜弘が学生として通っていました。昭和3年、阿部は村井を通じて中也と知り合います。中也是村井と阿部二人の下宿近くに引っ越し、毎日のように会っていたといいます。同人誌『白痴群』に参加、「深渊の諸相」「地靈の顔」「神の影像」など評論集を刊行し、ニイチエ、ゲーテなどの翻訳も多数あります。成城、東京、東京芸術大学に勤務、臨終に際しカトリックの洗礼を受け、昭和32（1957）年1月7日、52歳で死去。昭和62年、一穂社より『阿部六郎全集』全3巻が発行されました。

阿部は昭和12年5月に次男を亡くします。中也も前年11月に長男を亡くし、友人に「子供を亡くするとよく閉籠つてしまふ男があるものだが、阿部もさうらしいから慰めてやつてくれ」と言つてゐた

便箋

前略聞けば子供さん亡くされた由哀悼の意を表します。

小生事秋になつたら郷里に引上げようと思ひます。なんだか郷里住みといふ

中原中也書簡  
昭和12年7月7日（封筒  
3便箋 2枚 27・1×19・5）  
表  
裏  
消印  
鎌倉  
12・7・8 后0—4  
校／阿部六郎様  
七月七日

（学年貢 那須香）  
から離れた場所で存在の意味をつかんだ芸術家の顔も見ることができます。晩年、郷里にもどることに望みをたくし、東京での物語を終えようとした中也の書簡です。

阿部は、明治37（1904）年山形市に生まれます。昭和2年より成城高校のドイツ語教授となり、同時期に富永太郎の友人村井康男も赴任。この頃成城高校には、大岡昇平、古賀綱武、富永次郎、安原喜弘が学生として通っていました。昭和3年、阿部は村井を通じて中也と知り合います。中也是村井と阿部二人の下宿近くに引っ越し、毎日のように会っていたといいます。同人誌『白痴群』に参加、「深渊の諸相」「地靈の顔」「神の影像」など評論集を刊行し、ニイチエ、ゲーテなどの翻訳も多数あります。成城、東京、東京芸術大学に勤務、臨終に際しカトリックの洗礼を受け、昭和32（1957）年1月7日、52歳で死去。昭和62年、一穂社より『阿部六郎全集』全3巻が発行されました。

阿部は昭和12年5月に次男を亡くします。中也も前年11月に長男を亡くし、友人に「子供を亡くするとよく閉籠つてしまふ男があるものだが、阿部もさうらしいから慰めてやつてくれ」と言つてゐた

### 『AFTER』で第4回中原中也賞受賞 和合亮一さんが小学生に特別授業



詩集『AFTER』で第4回中原中也賞を受賞した和合亮一さん（福島市在住）が、中也の母校でもある山口市立湯田小学校を訪れ、6年生142人に「詩作」の特別授業を行いました。

詩の題材は記念館前にもあるカイヅカイブキの木。この木は明治9年から中原家にあったもので、中也、そして中原家をずっと見守っていた木です。

イブキの木を題材とした和合さんの楽しい詩作授業に予定していた3時間はあつと言葉間に終了。子供たちそれぞれが「中也さんの庭の木」と題した詩をつくり、その後全員の詩が記念館に届けられました。

記念館ではこれを詩集としてファイリング、大切に保存し、将来成長した“詩人たち”に再公開できれば、と思っています。

（2枚目）しますので、一応おたづねします。なんだか線路の上の家には／もうゐられないのではないかと思ふ。／僕としてはもうすぐにも帰りたいのですが、子供を連れ夏の汽車は／大変だといふので、やつ

阿部六郎様  
七月七日

中也

※■は文字訂正跡

は当分何もしないつもりです。／では御返事願ひます。住所と、だいたい夜がいいところ日曜がいいとか、／それとも夏休みになつてからなら何日頃から後がいいとお知らせ下さい。

阿部六郎様  
七月七日  
中也

ぱりどうしてもお■彼岸過ぎにしなければなら／ないのです。何しろ「ながい夏のお■休み」を、退屈しながら鎌倉／みたいなところ（飽屑みたいなところ）に暮らすのかと思ふと、いや／なつちやふ。／此の春以来可なり読書しました。それに去年子供に死なれてか／らといふものは、もうどんな詩情も湧きません。瀬戸内海の空の／下にでもゐたならば、また息を吹返すかも知れないと思ひます。／それで一度是非会つて帰りたいのですが、子供さんが亡くなられただし、今迄の家をもう越してゐはしないかと思つたり

此の十日ぐらゐ／何にも読みません。読まないでゐると幾分■旅情を感じたり／します。郷里に帰つてもフランス語以外は当分何もしないつもりです。／では御返事願ひます。住所と、だいたい夜がいいところ日曜がいいとか、／それとも夏休みになつてからなら何日頃から後がいいとお知らせ下さい。

# ましと年増婦の声 ～中也と私～

## 大谷巖

立たないが親切な人が多かった。市内、八坂神社のわきの料亭の大広間には、なるほど明治の元勲や軍の将星が書額の中に影のようにおさまっていたが、とにかく野心に満ちた荒々しい人たちは東京かどこかへ出払ったといった感じであつた。

そうした折りに私は「心置きなく泣かれよと、年増婦の低い声もする」という中也の詩を思い出していた。そして、幼年時代、広島、

今ではもう10数年もたつてしまつたが、私は山口で2年あまりを過ごしたことがある。東京から転勤になつたのである。はじめての単身赴任でもあつた。小郡から山口への車窓から冬枯れの盆地を流れる櫛野川をながめながら、ここは中也の故郷だとあらためて思つたりしたことを見い出す。

中也の名は子供のころから知つていた。父の書棚に『在りし日の歌』があつたからである。詩が好きで自らも詩を書いていた父が家族に読んでくれた詩の中にも中也の詩もあつた。中也詩のもつ人々つかしさ、人恋しさに子供ながら何となくひかれたものだつた。「ベトちゃんなど思ふけど、シユバちゃんではなくたうか?」というのがおかしいと無邪気に笑いころげた母を思い出したりもする。その父も母も今は亡い。

それはともかく、私の接した山口の人たちは総じてやさしかつた。女人だけでなく男の人もやさしいのである。目



筆者の養父 大谷従二

一生の根源としての幼児性を追つていった覚悟の程——を正にこの詩人の本質として考えてみたいと思つたりしている。

中也の亡父宛の書簡を含む関係資料を中原中也記念館に寄附させていただいだのが御縁となつて、私も仲間に入れていただいたが、諸兄姉のご教導を願つて筆を置かせていただく。

- 【新発見資料】  
・前川佐美雄宛・中原中也書簡8通  
・千駄木八郎訳・ルナアル「オノリーヌ婆さん」「日記抄」
- 【エッセイ】  
金子兜太 道浦母都子 いいだ  
定価 2000円(税込)  
もも

カディオ・ハーンもきっとどこかで「年増婦」の声を聞き、つまるところ松江の日本女性と結婚するに至つたのではないから余談ながら想像している。

年をとつたせいで笑われるかもしれないが、中也も晩年は山口に帰りたがつてたのだし、何か中也の持つていた都会人小林秀雄とはちがう故郷意識についても考えてみたいと思い、と同時に中也のアニマに対する中也自身の幼児意識

## 中原中也研究 第4号

### 発売中



問い合わせ 中原中也記念館  
電話 083-932-6430

# 大谷従二と中原中也

寄贈書簡解説

平成10年10月3日、従二の甥であり養子である大谷巖氏より、中原中也の書いた大谷従二宛のはがき、中也の死亡通知、中也の母フク筆お悔やみ札状の3通を記念館にご寄贈いただきました。

大谷従二は、大正4(1915)年、島根県簸川(ひかわ)郡大社町に生まれました。旧制中学の頃から兄の影響により文学青年となつた従二は、同級生とともに同人誌を創刊し、プロレタリア詩人を目指します。

昭和9年頃、小熊秀雄、千家元麿ら同人の詩雑誌「詩精神」に参加。「一九三四年詩集」(昭和9年10月20日前奏社刊)には、「工屋戦」のペジネームで詩「最後の一日」が掲載されており、奇しくも同詩集に中也の詩「憔悴」が収録

されています。  
しかし、中也は東京、従二是島根で活動しており、この頃二人が交流を持つたという記録はないようです。

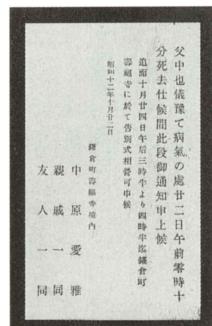
昭和11年、第1詩集『夜の色』を刊行。昭和59年、長編叙事詩「朽ちゆく花々」で第17回小熊秀雄賞受賞。また、出雲古代文化など郷土史の研究もすすめ、平成元年、「出雲阿国の新研究」「出雲から見た阿国」で新人物往来社第14回郷土史研究優秀賞受賞しています。平成2年死去。大谷巖編『大谷従二詩集』(平成10年2月10日鳥影社刊)があります。

従二是昭和12年9月20日付で、中原中也に『ランボオ詩集』(昭和12年9月15日野田書房刊)についての問い合わせはがきを出しています。(残されたものが返信はがきなので、おそらく往復はがきで問い合わせたのでしよう)中也是丁寧に返事を書いて送っています。

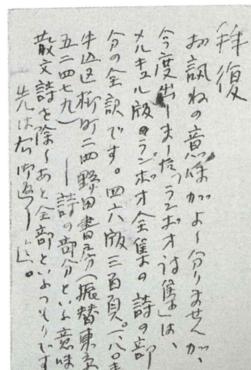
この約1か月後、10月22日に中也は他界しますが、はがきに書かれた文字の勢いは決して衰えてはいません。最晩年の見知らぬ青年とのやりとりを中也は誠実に果たしており、細やかな一面がうかがえます。  
従二もまた、中原家から送られた死亡通知に対し、自分の兄を亡くした経験を重ねて悔やみ札状を書き、フクより丁寧な札状が送られています。

中也の死という境界を越えて書かれた書簡に、深い感慨を覚えます。

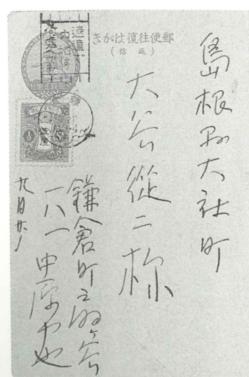
(学芸員 那須香)



中原中也死亡通知



昭和12年9月 大谷従二宛はがき



## 角川版旧全集を全面改訂、 30年ぶりの本格的・新編「定本」全集! **新編中原中也全集** 全5巻十別巻1

編集委員 大岡昇平・中村稔・吉田灘生・  
宇佐美斉・佐々木幹郎



### 各巻、前列のない画期的二分冊構成!

- ①「本文篇」=厳密な校訂による新本文の確定  
②「解題篇」=各作品の成立・推敲過程を詳述

第一巻	詩 I	(第1回配本) 新発見詩篇2
第二巻	詩 II	(第3回配本) 新発見詩篇2
第三巻	翻訳	(第2回配本) 新発見散文3
第四巻	評論・小説	(第4回配本) 新発見草稿4
第五巻	日記・書簡	(第5回配本) 新発見「療養日誌」・新書簡3 1

別巻 (上) 写真・図版篇 (第6回配本)  
(下) 資料・研究篇 初公開資料多数

### 〈造本〉

四六版・並製・カバー装・美装貼函入  
各巻〔本文篇〕〔解題篇〕二分冊(分壳不可)

〈予価〉 本体 8000円~8500円(税別)

2000年3月より刊行開始/隔月刊予定  
第一巻発売中/定価=本体7800円(税別)

角川書店  
東京都千代田区富士見2-13-3  
郵便番号102-8177  
電話03-3238-8521  
FAX 03-3262-7734

# 主なできごと

(1999年3月~)

2000年2月)

- 3月31日 「中原中也記念館報」第4号発行  
4月1日 小企画展「中原中也賞」  
上旬 記念館本館補修工事完了  
（~6月2日）

号発行

- 宏昭写真展（~6月27日）  
来館者25万人を達成（25万人）  
目は福岡県苅田町の早田涼子  
さん  
14点が安原家から寄託され  
たことを報道発表

28日 安原喜弘宛中也直筆書簡等1

大会△シンポジウム「中原中  
也 近代詩の中の恋愛」パ  
ネリスト 中村稔、宇佐美  
斉、國生雅子（司会）北川  
透△講演「中原中也の言葉」  
の音楽―歌から詩へ詩から歌  
～岡井隆△アトラクション  
「弥生の笛～ミニコンサート」  
田村洋△文学散歩 金子み  
すゞのふるさと紀行



写真右 故安原喜弘氏ご子息  
左 福田百合子館長 安原喜秀氏

- 9月1日 小企画展「中原中也と『四季』」  
市湯田温泉 ホテルニュー  
タナカ) 中原中也の会第4回  
大会△シンポジウム「中原中  
也の会」  
回研究集会・於思文閣美術  
館△シンポジウム「京都時  
代の中原中也とダダイズム」

10月19日 小企画展「中原中也と『四季』」  
NHK-TV「詩のボクシン  
グ」収録に協力 (山口市出身  
の陳樹立さんが準優勝)

- 10月20日 NHK-TV「詩のボクシン  
グ」取録に協力 (山口市出身  
の阿部六郎宛中也直筆書簡2通  
が阿部氏遺族から寄贈された  
こと) 報道発表  
20日 中也命日・墓参り

- 11月20日 思文閣美術館企画展「中原中  
也 京都からの出発」（~12  
月19日）主催思文閣美術館  
（京都市）

2月6日 小企画展「中原中也と『歴程』」  
（~3月26日）

- 1月26日 中也が中村古嶽療養所に入院し  
ていた際に書いた日誌がみつか  
り、その内容が公開される  
2月6日 開館6周年（同日無料開放）  
18日 第5回中原中也賞選考会が、  
西村屋旅館（山口市湯田温泉）  
で開催され、神奈川県住の  
蜂飼耳さんの詩集『いまにも  
うるおつていく陣地』（紫陽  
社）が選ばれる



- 5月1日 1時間の開館時間延長スター  
ト（5月~10月の閉館時間を  
18時とする）  
小企画展「中也の故里」藤井  
（下関 詩を朗読する会「峠」  
会長）



- 7月3日 小企画展「中原中也と『四季』」  
（~8月29日）



写真右 故安原喜弘氏ご子息  
左 福田百合子館長 安原喜秀氏

- 7月3日 公開講座（於山口市湯田温泉  
サンフレッシュ山口）「中原  
中也の現代性」青木健（作  
家・文芸評論家）

24日 公開講座「広島における中原  
中也」松坂義孝（医師・松坂  
医院院長）

31日 公開講座「中原中也―詩の中  
の「明治」」高橋順子（元日  
本女子大学付属高校講師）

8月21日 公開講座「朗読のための中也

（ゆやくよーん）」野村忠司  
（下関 詩を朗読する会「峠」  
会長）

5月1日 1時間の開館時間延長スター  
ト（5月~10月の閉館時間を  
18時とする）

6月3日 小企画展「中也の故里」藤井  
（下関 詩を朗読する会「峠」  
会長）

ここと世界をむすぶこと  
ば△トークセッション「  
中也とふるさと」など

（ゆやくよーん）」野村忠司  
（下関 詩を朗読する会「峠」  
会長）

5月1日 1時間の開館時間延長スター  
ト（5月~10月の閉館時間を  
18時とする）

6月3日 小企画展「中也の故里」藤井  
（下関 詩を朗読する会「峠」  
会長）

5月1日 1時間の開館時間延長スター  
ト（5月~10月の閉館時間を  
18時とする）

6月3日 小企画展「中也の故里」藤井  
（下関 詩を朗読する会「峠」  
会長）

（ゆやくよーん）」野村忠司  
（下関 詩を朗読する会「峠」  
会長）

5月1日 1時間の開館時間延長スター  
ト（5月~10月の閉館時間を  
18時とする）

6月3日 小企画展「中也の故里」藤井  
（下関 詩を朗読する会「峠」  
会長）

# 平成11年度の 中原中也記念館

平成11年度企画展

## 「中也の軌跡IV」

### 『在りし日の歌』のなかの子供

今年度の企画展は、中也の第2詩集『在りし日の歌』を中心として、(へこども)を歌つた詩の世界を紹介、10月27日(水)から11月28日(日)までの約1ヶ月間、開催されました。

初日は、ご遺族の中原美枝子氏、監修の佐々木幹郎氏(詩人・新編中原中也全集編集委員)、山田博英教育次長、福田百合子館長のテーブカットではじまりました。

#### 展示1 文也の誕生

昭和9年、第1詩集『山羊の歌』が出版される2か月ほど前、長男文也が生まれます。中也は妻孝子と山口に帰省。出産に備えますが、予定日になつても生まれず、中也は一人上京します。『山羊の歌』出版のためでした。詩集は12月7日に完成。予約者や詩人達に送本した後、中也は山口へ戻り、10月18日に生まれた文也と初めて対面します。文也の育つ様子を見つめることになった中也から、新たな詩の世界が紡ぎだされます。子供を題材とした詩には、慈しみや愛情が溢れています。

#### 展示2 文也逝去

満2歳の誕生日を迎えて間もなく、文也は亡くなります。中也の悲しみの様子は日記帖に刻まれています。昭和11年

11月4日に「明日頃にはなほるであらう。」すぐ隣の11月10日には、突然筆で、文也逝去の記事と戒名が大きく記されます。数頁の空白をとり、12月12日、「文也の一生」が書かれます。誕生の日から万国博覧会に行つた日で中断。その後続けて「夏の夜の博覧会は悲しからずや」を書き、同月24日、「夏の夜の……」の推敲がなされ「冬の長門峠」が書かれます。文也逝去の記事からはすべて黒い墨書きで、中也の慟哭が聞こえてくるかのようです。

#### 展示3 こぞの雪今いづこ

文也が亡くなつたひと月後、次男愛雅が誕生します。しかし、中也の哀しみが癒されることはありませんでした。昭和12年1月、神経衰弱が高じ中村古峠療養所に入院。2月には退院し、文也の思い出の残る東京を離れ、鎌倉へ転居します。文也同様、中也は愛雅を可愛がります。写真を撮り、アルバムに貼り付け、日記には「坊や」の記事。文也の死の前から準備していた第2詩集には『去年の雪』の題名が考えられますが、退院後、詩集の編集は新たにはじまり、題名は

## 中原中也記念館 公開講座



文芸評論家の青木健氏

中原中也の人と作品を広く知っていただくために、平成8年度からスタートした公開講座も5年目を迎えました。

11年度も中原中也の会の協力を得ながら、7月3日から4回にわたってサンフレッシュ山口(山口市湯田温泉)で開催しました。

第1回目は作家で文芸評論家の青木健氏による「中原中也の現代性」。『年表作家読本 中原中也』(河出書房新社)の編著者である氏は、中也の略年表と日本の生活史を対比させながら、中也詩とその当時の時代背景を丁寧にお話しさされました。

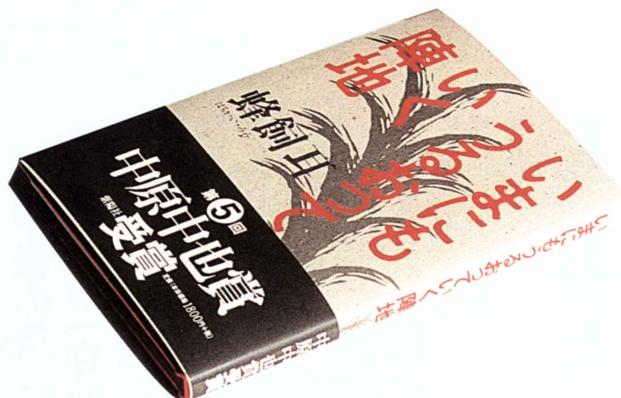
7月24日は医師の松坂義孝氏。氏は旧全集において中也の病歴を解説されていらっしゃいます。「広島における中原中也」と題した講座では、広島と中也との関係とともに、広島と森鷗外についての切り口でもお話をいただきました。

第3回目は高橋順子氏が「中原中也ー詩の中の<明治>」と題し、中也詩「春の夜」にててくる“蕃紅花色”(さふらん色)を中心に、色彩にこだわって詩を読み説くことについて解説されました。

第4回目は下関で自作詩を肉声で朗読する会「峠」の会長をされている野村忠司氏。ご自身が書かれた朗読詩劇「中也ゆやゆよーん」を受講者それぞれが皆声をだして朗読、楽しい講座となりました。

また、中原中也の会と共に中原中也の会大会での岡井隆氏の講演を特別講座として開催、多くの参加がありました。

毎回、講座終了後には、受講者と講師を囲んでの簡単なティーパーティーを実施、講座とは違う雰囲気で楽しく気さくな場となりました。受講者も講師の方にも喜んでいただき、今後もこうした場の設定を行っていきたいと考えています。



第5回

## 中原中也賞

### 『いまにも うるおって いく陣地』

蜂飼 耳さん



蜂飼 耳さん

第5回中原中也賞の選考会が平成12年2月19日、中也が結婚式をあげた山口市湯田温泉の西村屋旅館葵の間で開かれました。252詩集（応募241詩集推薦11詩集）の中から、最終選考に残った7詩集で協議がなされ、選考の結果、神奈川県座間市在住の大学院生・蜂飼耳さんの第一詩集『いまにもうるおつていく陣地』が選ばされました。

選考委員を代表して中村稔氏は「この詩集は生命感にあふれ、豊かなリズム感に富み、生理感覚を越えた身体的な動きのびやかさがある。現代詩の潮流の離れた場所で、きわめて個性的な世界をきりひらいている」と評価しました。

蜂飼さんは「たいへんうれしく思っています。殺人事件が多くあるなど今の時代は人間が大切にされていらない気がしているので、ことばによって人間を大切していくのが詩人の役目だと思っています。これからも正直な気持ちで詩をつくっていきたいと思います。」と受賞の喜びを語りました。

### 第6回中原中也賞

## 作品募集

あなたも【中原中也の会】の会員になりませんか？

### ●会員募集中●

中原中也の会ではたくさんの皆様の入会をお待ちしています。  
中原中也の会ではたくさんの皆様の入会をお待ちしています。

**【対象】** 平成11年12月1日から平成12年11月30日までに刊行された現代詩の詩集（奥付の刊行年月日による）。

**【正賞】** 受賞詩集を英訳本として出版

\*学生（大学院生も含む）は半額

**【個人会員】** 5000円

**【法人会員】** 一口10000円

次のような特典があります。

会主催の大会、研究集会、シンポジウムなどへの参加  
『中原中也研究』の購読

中原中也記念館が行う事業の優先的  
案内など

入会お申込みは、中原中也の会事務局への郵送もしくはEメールにて  
中原中也記念館内「中原中也の会」  
会報」の送付

入会お申込みは、中原中也の会事務局への郵送もしくはEメールにて  
中原中也記念館内「中原中也の会」  
会報」の送付

### 事務局

〒753-10056  
山口市湯田温泉一丁目11-21  
中原中也記念館気付

「中原中也賞事務局」行

(送付先)  
〒753-10056  
山口市湯田温泉一丁目11-21  
中原中也記念館気付

**【発表】** 平成13年(2001年)2月の  
選考会終了後、報道機関を通じて発表し

中原中也記念館内「中原中也の会」  
会報」の送付

〒753-10056  
山口市湯田温泉一丁目11-21  
中原中也記念館内「中原中也の会」  
会報」の送付

電話 083-932-6430  
FAX 083-932-6431  
Eメールアドレス cityyama@ymg.urban.ne.jp

●発行

中原中也記念館 館報 第5号 平成12年3月31日  
〒753-0056 山口県山口市湯田温泉一丁目11-21  
TEL 083-932-6430 FAX 083-932-6431